
I change little by little

yuki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I c h a n g e l i t t l e b y l i t t l e

【Nコード】

N 7 4 2 9 B

【作者名】

y u k i

【あらすじ】

伝えたい事があるけれど言えない。思いを閉じ込めるって、すごく辛くそして悲しい…。でも、あなたの幸せを願う。体が戻れぬまま中学生になった、コナンと哀の切ないラブストーリー…

「 1・プロローグ」(前書き)

久しぶりの投稿です！

高校受験に成功し、やっと小説を書く時間が出来ました。

そして前作「二人でいるコトで…」について。

長い間、更新もせず申し訳ありませんでした！！

今回は二人でいるコトで…のリニユアルのようなものです。

なので物語の世界は雰囲気と同じ(似ている)です。

きちんとラストまで投稿するつもりなので、応援宜しくお願いします！

「 1・プロローグ 」

もしかしてあなたは気付いてる？

私の気持ち、そうあなたへの思いを…

最近なんだかあなたが優しすぎるから、ふとそう思う

別に私はあなたに好きになってもらおうとか、そんなんじゃない

だから無理にやさしくしないで

きつと、もうすぐ元に戻る日が来る

だからその時は、彼女のもとに戻ってあげて…

それを私が望むから

「 1・プロローグ」(後書き)

まず、哀ちゃんの心境です。

分かりにくかったかな？

次からスクールライフに突入ですっ!!!

「 2・入学式」(前書き)

明日から2日間、たぶん投稿できないであろうので、今日2つめの投稿です。

今回は入学式のコナンSIDEとなっています。

哀ちゃん視点からの入学式も、早めに更新したいと思っています。

「 2・入学式 」

(SIDE・コナン)

4月、出会いと別れの季節

そして俺は小学生から中学生へ…

なんだかもう、この生活には慣れすぎた

実年齢はもうとくに20歳を過ぎているが、でも中学生

人は時間が経つと、心が変わってしまう

あんなに好きだったアイツのことを、女として好きじゃなくなった

それに俺には、アイツを好きでいる資格はないだろう

もう、人を待たせておくのは嫌だ

もとの体には戻れないかもしれない、でもいい

俺には、今大切にしたい人がいる

二人で一緒に入れるなら、それだけでいいんだ

「ちょっと、なあに考え込んでるのコナン君？学校始まっち

やうよ！」

びくつとして振り向くと、歩美がいた

俺が言うのもなんだが、歩美は綺麗になってきたと思う

歩美を好きになる奴は、中学校でもたくさん出来るはずだ

「おはよ、歩美ちゃん」

「おはようあれっ哀ちゃんは？一緒じゃないの？」

「あ、うん。なんか博士が体壊したみたいで、いろいろやってから来るみたい」

「そっかあ。ってコナン君時間！急ごう」

【 中学校入学式 】

入学式の前に自分の教室にとりあえずわかれる

俺のクラスは「1 - B」

入ってみると知っている奴は3人ほど

その中に少年探偵団のメンバーはいなかった

クラスがわかれたみたいだ

しかし、みんなういしい

俺なんか2回目だし、もうときめきなんてあったもんじゃ…

「あら、工藤…江戸川君もB組？宜しく。他のメンバーは？」

誰かに肩をたたかれたと思い、横を向くと灰原だった

そして俺は恥ずかしながら見とれてしまった

たしかに歩美ちゃんは綺麗、しかし灰原はもっと…

「何、どうかしたの？」

ふっと我に返る

「なんことねえよ。アイツらは他のクラスらしいな」

「そう、残念だわ」

「まあな、でもお前が同じクラスで良かったよ」

「そう？ありがと。あなたがそんなこと言うと以外ね…」

周りを見渡さなくても雰囲気分かる

クラスの男子も女子も、灰原を見る

前から大人っぽかったが、最近体も成長してきて…

そして中学校のセーラー服が、とても似合っていて…

コイツほど完璧な奴がいるのか？って思う事もある

でも、性格はちょい悪いけど

とりあえず…同じクラスで良かった

きつと灰原ファンに俺はにらまれるんだろうな

「 2・入学式 」（後書き）

本当に灰原さんは美人だと思いますよ！

まさにクールビューティーなのは？

恋愛要素を、どんどん盛り込んでいくので応援宜しくお願いします。
メッセージとか残してもらえると、すごくうれしいです！！

「 2・教室 」 (前書き)

今回は入学式の日の哀ちゃんSIDEのお話です

私も哀ちゃんみたいに、自分の気持ちが素直に伝えられなくて悔やんだ事があります。

そんな感じで中学校も終わってしまったし…

とにかく哀ちゃんには後悔のしない恋をして欲しいです。

「 2・教室 」

(哀SIDE)

今日は中学校の入学式、でも少し遅れるかもしれない

博士が風邪をひいたせいで、今日の朝まで看病が大変だったから

けれど博士は大事な人、だからまったく苦ではない

工藤君には遅刻して欲しくないから、一人で学校に行ってもらった

彼は中学校の入学式も2回目だと、ずいぶん面倒にしていた

そしてやはりいつも考える、私は彼にずいぶん迷惑かけてると…

だってもう6年目、なのにまだもとの体に戻せていないんだもの

ごめんなさい…そしてあとひとつ謝らなくてはいけないことがある

それは彼を、工藤君のことが好きになっちゃったこと

最初は自分の中で、その気持ちを否定しようとしていた

でも出来なかった

やっぱり彼に出会ってから、私は変わってきたみたい

『工藤君と一緒にいたい！このまま戻れなくてもいい』

そう思ってしまう自分がいる

こんな自分が、私は大嫌い

「おい、哀君！どうした、考え事か？」

「博士…体具合はどう？少しは楽になった」

「もちろんじゃ。哀君が看病してくれておかげで、ずいぶん良くな
ったわい」

「そう、良かったわ。私これから学校行くわ。薬はそのテーブル
よ」

「了解。いつてらっしゃい。新一たちと同じくらすだといいの」

「そうね…それも良いかもね」

教室「 1 - B 」にて

私のクラスはB組だった

貼り出してのクラス発表ではなく、各自に紙が渡されてそれに書か
れていた

工藤君は何組だろうか？

そしてその他のメンバーは？

私は工藤君とは別の意味の好きで、吉田さん・円谷君・小嶋君が好きだ

3人とも温かく、私には贅沢な友達かもしれない

「あつ、灰原さ〜ん!!」

声の主は円谷君だった

「あら、円谷君おはよう」

「灰原さん何組でしたか？僕と元太君はC組です。ちなみに歩美ちゃんもA組です」

「残念、私はB組よ」

「そうですか。たしかB組はコナン君がいたはずですよ!!」

「!!」

「灰原さん？」

「そ、そう…彼もB組」

「二人がいるから、僕B組にたまに遊びに行きますね!」

そう言うと、円谷君は自分の教室に入っていた

私も自分の教室に入らなくては…

B組のドアを開けると、窓側の後ろから2番目の席に彼は座っていた

ただ窓を見ているように見えた

近頃の彼は、顔も背も大人に近づいて来ている

整った顔に、知的な雰囲気

きつとこのクラスの子も、他のクラスの子も、彼をほっておかないだろう

私も…彼に引き込まれてしまうひとり

私は思い切って彼の肩をたたいた

「あら、工藤…江戸川君もB組?宜しく。他のメンバーは?」

平然を装った…すごくドキドキしている

「アイツらは他のクラスらしいな」

「そう、残念だわ」

「まあな、でもお前が同じクラスで良かったよ」

私はびっくりした

彼はただ言ってみただけなのかもしれない

けど、なんだかうれしくなった

私もあなたと同じクラスで良かったって、伝えたくなった

「そう？ありがとう。あなたがそんなこと言うとは外ね…」

こう言いたかった訳じゃないのに、やはり私は素直になれない

いつか…彼に素直な気持ちを伝えられる日は来るのであろうか

「 2・教室」(後書き)

次からは二人の關係に少しずつ変化をもたせていききたいと思います。
ぜひぜひお楽しみに!!

「 3・昼下がりの天使 」 (前書き)

これは「二人でいるコトで…」の第三話のリメイクです。けれど、新しい会話や心理描写が入っているので、前に三話の方を読んでくださった方も、ぜひ読んでみてください！

「 3・昼下がりの天使 」

(哀SIDE)

中学校が始まって一ヶ月

大体の人が学校に慣れてきたみたい

昼休みは一人でいる事が多い

それに仲の良い吉田さんは隣のクラス

たまに吉田さんといるときもあるけれど、活発な彼女についていくのは大変

一人って嫌いじゃないし、いろいろ落ち着いて考えられる

このクラスは何だかみんな元気がいい

教室にいつもいるのは、私と難易度の高い高校を受験する人達…

といっても先生に勉強を聞きに行くか、図書室で勉強をやるか

だから実際は私だけ

工藤君は、毎日のように外でサッカーをしている

彼が言うには、中学校で唯一良いことはサッカーがたくさん出来る事だとか

今日も、得意のサッカーをやっているのかと思って外を見ても、その中に彼はいなかった

不安… たったこれだけの事だけど、それだけで何か足りないような気持ちになる

彼がサッカーをしている姿を見て、私はいつも安心していたのだ

私の心、だいぶ弱くなっちゃったみたい

自分を変えて社交的になって、昼休みほかの場所で遊ぶ事は出来るかもしれない

でも私が何か変わったら、彼が離れてしまっ気がするから…

(コナンSIDE)

俺は昼休みはいつもサッカーをしている

「遊ばうぜ」と声をかけてくる奴と適当に

けど今でも、基本的に話せるのは元太と光彦くらいだ

アイツは… 灰原はいつも教室で本を読んでいるみたいだ

その姿はなんと言うか近づきにくいけれど、なんかきれいで…

素直に声をかけたらいいのに、ためらっている

そっけなくされたら、きっと大きなダメージになってしまうから

小学校の頃から灰原は変わっていない

そんな灰原を見ることが安心してゐる自分がある

けれど、今日は少し近づいてみよう

そろそろ俺達も変わらなくちゃいけない

(哀SIDE)

「よお灰原。また読書かよ？」

「工藤君…」

突然でおどろいた

さっきまで私一人だった教室に彼がいたから

「誰もいないことだし、遠慮せず話せよ」

彼はそう言つと哀の隣の席に座つた。

「…2回目の中学生生活は、暇で仕方が無いのかしら工藤君？」

私つて…本当に素直じゃない

「そういつんじゃねえよ。ただ…たまにお前といるのも良いかなあつて」

「なつ、何言つてるのよ…」

彼はくさいセリフの天才、聞いてるこっちが恥ずかしくなる

「なあ、いつつも何の本読んでるんだ？」

「HOW・TO本…かな」

なんてね…あなたの話しについて行きたいから、推理小説ばかり読んでる

今日のは違つてて良かった

「俺の厳選した推理小説でもどうよ」

「あなたの推理オタク、移さないでよ」

「なっ、蘭みたいな事言って…」

「……」

「悪い、蘭の名前出して」

そんな…謝らないでよ

「別に…私に気なんか使わなくてくれる？」

「なあ灰原、俺はアイツの事はもう…思い出だから」

思い出？彼は私に何を伝えたいのだろう

「だから、何？」

「ん…だからあれだ、昼休みでも使って、新しい思い出でも作ろうか…俺達で」

私は少し戸惑った

でも今だ、今が素直になる時だ

「それも…良いかもね」

私は顔を少しゆるめて答えた

(コナンSIDE)

灰原が少し笑ったように見えた

すごく、すごく、可愛かった

「…やっぱりオメエにはかなわないな」

「それって、どういう意味よ？」

どういって…今お前は俺の中で一番って意味だっつーの

「さあな、シークレット、シークレット(笑)」

一人は落ち着くものだけど、でもそれよりも二人の方が幸せになれるはず

(哀 and コナン)

2 回目の中学生は、前よりも甘酸っぱく…

二人でいる昼休みが日常になったら良いのにと、心底思った。

「 3・昼下がりの天使 」（後書き）

私が漫画に詳しくなったのは、好きな人がオタク？てきな奴だったからです。

と言ってもそいつ、頭がいい奴なんですけど。

彼が話す事を理解しようと、いっぱい本を読みまくったあの頃…
もう一年以上前のことです。

それでは、感想など宜しくお願いします！！

「 5・切ない思いと夏の夜」(前書き)

今投稿しておかないと2・3日更新出来ないなので、今回はちょっと長めです！

少年探偵団の一行は久しぶりのキャンプへ…
コナンと哀の関係に進展が！

「 5・切ない思いと夏の夜」

(コナンSIDE)

7月の下旬

今日は久しぶりに、博士と少年探偵団でキャンプだ

久しぶりの全員集合でなんだか懐かしい

最近はみんな部活なんかで忙しくて、学校ですれ違っただった
好きだと意識し始めてから、博士の家に行っても灰原が何している
かばかり気になる

まあ、だいたいは研究室にこもりつきりなただけだと

けど今日はそんなこと気にしなくて良い

見えるところに灰原がいるから

灰原は歩美ちゃんと積もる話があるらしく、さっきから二人で話し込んでいる

もしかして俺の話しているんじゃないか?とか、いろんなことを考えてしまう

やばい俺…本当に心が中学生になって来た

「哀ちゃんと歩美ちゃんの会話」

「ねえ哀ちゃん…コナン君ってやっぱりクラスでもモテちゃってる？」

「私は他の女子とあんまり会話していないけど、知っているだけで四人くらいかしら」

「やっぱりそうだね、コナン君かっこいいし、頭良いし…」

「そう？吉田さんも女子の中では可愛くて頭が良いほうだと思うけど」

「哀ちゃんには負けるよ。哀ちゃんは顔も頭も、きつとうちの中学校で一番だよ！！」

「ありがと。そんなにほめられると照れるわね」

「歩美ね、哀ちゃんだからいいけど、きつと他の才色兼備の人には嫉妬しちゃうな」

「私はどうしていいの？」

「だって哀ちゃんは、小さい頃からの憧れだもん、だから…だからね、コナン君と結ばれるとしたら哀ちゃんじゃないとダメ、絶対にダメ！」

「でも吉田さんは江戸川君のこと…」

「そりゃぁ好きだよ！大好き！でも見てるとね、コナン君の気持ち分かつちゃうんだぁ」

「江戸川君の気持ちが分かる？」

「きつと哀ちゃんはまだ気付いていないんだよ、コナン君の気持ち。だから早く気付いてあげて！そうしたら哀ちゃんも、コナン君も幸せになれるよ」

（哀SIDE）

私が気付いていない、工藤君の気持ち…

いったいなにかしら、私の事が好きとか？

まさかね、彼にかぎってそんなことはないわよね

でも…少し期待してしまう

昼休みの教室で彼は『蘭さんは思い出』って言ってた

今の気持ちは、私に向いてくれているのかしら…

（コナンSIDE）

バーベキューなどをしてみんなでわいわい騒いだ

テントは3つ、博士と俺・光彦と元太・歩美と灰原

博士はガキみたいにはしゃぎすぎて疲れたんだろう、もう眠っている

隣のテントからは元太の大きないびきが聞こえる

光彦…あんな中でちゃんと眠れるか？

確かに俺も今までよりも、今日ははしゃいだ気がする

好きな奴と一緒にだから、このメンバーがやっぱり好きだから

正直な所、新一よりコナンとしての小学校生活のほうが楽しかった

もちろん新一のときも蘭がいて、園子がいて…それなりに良かった

でも、少年探偵団とはいくつもの事件を解決してきて、いろんな所に行つて…

黒の組織の事で悩んで、くじけそうになったときも、あいつ等がいたから頑張れたと思う

俺つてよっぱど少年探偵団が好きなんだな…

そんなことを考えながらテントを出て、近くの川に行くとそこに灰原がいた

月明かりがあたって、いつもより綺麗に見える

気持ちを伝えるなら今かもしれない

ふと思った

「おい灰原、お前どうしてここにいるんだ？」

「あら悪いかしら？いつもと違う所じゃ眠れないのよ。それに…考え事してたから」

「そっか…なあ、俺お前にさ、伝えたいことがあるんだけど」

「…何？」

「ちょっと待て、心の準備すつから」

一回、大きく深呼吸をした

「ちよつと、そんなに緊張する話なの？」

「お前ってかなり鈍感だから、今から言うことよく聞けよ！！俺が教室で言ったこと、一緒に思い出作っていきうっていうのは…お前の事が好きだから、これからもずっと一緒にいたいって意味なんだよ！！」

半分やけくそに近い感じだった

灰原は目を丸くしていた

「工藤君、本当に？私の事…」

「前からだよ、正確に言うところ小学校三年あたりから…って何恥ずかしいこと言ってるんだろ俺」

「そう。私は…私は工藤君のこと、小学校一年生から好きだった」

「えっ!？」

思いがけない言葉に、俺は放心状態になった

中学一年7月、俺の気持ちがいっしょに届いた

そして俺達は、手を繋いでテントに帰った

(哀SIDE)

繋いだ手が、涙が出るくらい嬉しかった

こんなに素直になれるなんて…自分でも驚き

きつと、こんな風になれたのは吉田さんのおかげ

ありがとう吉田さん、彼の気持ちわかったわ

これから幸せになれるかもしれない

このまま…工藤君とこの体で、一緒に成長していけたらそれでいい

「 5・切ない思いと夏の夜」(後書き)

どうでしたでしょうか？

これからは両思いになった後の二人を描いていきたいと思っています。
中学卒業までの話しを作るつもりです。

応援や感想などのメッセージ、宜しくお願いします。
では…

「 6・近づいてく距離」(前書き)

すごく更新が遅れました。

何ヶ月間も更新しないで、コメントを寄せてくださっていた方、本当に申し訳ございません。

もう少しでマイPCが手に入りそうなので、そうしたら毎日バンバン書けると思います。

「 6・近づいてく距離 」

気持ちを通じ合ったら、こんなに心って温くなるんだな

さっきのアイツの笑った顔が、照れた顔が、どんどん浮かんできて
顔がゆるんでしまう

（ヤバイっ……俺ってそうとう灰原のこと好きなんだな）

アイツが…灰原が、俺を受け入れてくれたことが嬉しくてたまらない
だからだろう。明日が楽しみで仕方ない

早く灰原の顔が見たくて、話がしたくて……

ああ、俺って本当に中学生だ

はしゃいでいる自分が恥ずかしいけれど

この気持ちをおさえられる位俺はまだ大人じゃないらしい

そんな無邪気な俺にも、ひとつだけ不安がある

新しい関係に変わって、お互い上手くやっていけるだろうか？

俺は今まで以上にやきもちやいたり、触れなくなったり……

正直、自分をコントロールできる自信がない

灰原みたいにクールじゃない俺は、きっとテンパってしまう

それでバカなこととして灰原を怒らせないか心配だ

灰原は、俺がこんなに心配性だなんて思ってたねえだろ？なあ……

『 次の日朝 』

「コナン君、起きてくださいよ！！元太君だってもう顔洗っているんですよ」

「ん…光彦か、今何時だ?？」

「7時半ですよ。いつも早く起きてるのに、今日は珍しいですね」

「まあな……」

(はしやぎ過ぎて寝坊か……恥ずかしいぜ)

「じゃあ僕先に行ってますから、コナン君も早く来てくださいね！」

「おう!! わかったわかった」

急いで支度してみんなの所へ向かうと、朝食の用意が出来ていた

思わず灰原を目で追ってしまっ

白い膝丈のワンピースがよく似合っている

「コナン君おそ〜い!! せかつく哀ちゃんと早起きして料理したんだから」

「そうよ。せっかく頑張ったのに、名探偵さんがお寝坊なんてね」

灰原は俺を見てクスクス笑っている

俺が寝坊した理由、気付いてねえと良いけど……

「わりくなんか昨日眠れなくってさ……」

「あらそう。まあいいわ。さあみんな食べましょう」

「なあ灰原、おめえは……ぐっすり眠れたのかよ？」

「当たり前じゃない？眠れない理由もないし……ね」

「あっそう。俺の気持ちも知らないで……」

俺がすねた顔を見ると、みんなの目を盗んで、灰原が俺の耳に顔を近づける

「ウソ、私も眠れなかった。ただ寝坊しなかっただけよ」

「……」

俺の顔のすぐ近くで、灰原が無邪気に笑っている

こいつ、いつからこんな可愛い顔するようになったけ??

「何ぼうつとしてるの？早く食べましょ」

「そうだな……」

まだ、両想いになって時間がたってないけれど

やっぱりどこか変わった気がする

お互い素直になることで、こんなに楽しくなるなんて

もう少し早く勇気出しても良かったかもしれないな

俺は少しずつ近づく距離が嬉しくて、大事にしないとなって思った

「 6・近づいてく距離 」 (後書き)

久しぶりの執筆でしたので、へんな文章だったかもしれませんね (><)

最後まで読んでくださった方、ありがとうございました!!
次回から学園風な展開にしていくつもりです (笑)

「 7・幸福の朝」(前書き)

今回のお話しは哀ちゃん視点です!!

前回はコナン視点だったので()ノ

季節は夏の終わり頃です

「 7・幸福の朝」

夏休みが終わって、今日から学校が始まる

あのキャンプの夜からもう半月経ったと思うと、不思議な感じがする

彼と想いが通じた日……

人生で一番幸せを感じた日

ずっと片想いだと思っていたから、嬉しくて、そして怖かった

急に関係が変わって、ぎくしゃくしてしまったらどうしよう

私の好きな工藤君のままでいてくれるのか

そして私は工藤君が好きと言ったままの私でいれるだろうか

こんな事ばかり考えていた

けれどその心配をよそに、夏休みの間、彼は今までと変わらないで私に接した

普通に博士の家に来て、私の研究室に顔出して

一緒にコーヒー飲んだり、最近の事件について話したり

今までとまったく同じ

手も……あれから繋いでいない

別に変化が欲しいわけじゃなかった

想いが通じれば、それだけで良いと思ってた

でも、私は贅沢だから

もっと多くを望んでしまっている

駄目ね……これじゃあ

私、また弱くなっただ

ピンポーン

「灰原いるか」早く学校行こうぜ」

「ちょっと待っていてくれる？」

「んじゃあ中に入れてくれ」

「ええ……」

玄関のドアを開けると、学生服姿の工藤君が立っていた

いかにも“新学期が楽しみでたまらない”といった顔で

「ごめんなさい、考え事してたら準備するの忘れてて……まだ制服になってないのよ」

「いいよ、時間あるし。待つから」

「時間あるって、あなた朝練の時間ギリギリじゃない？私は後で行くから、先に学校行つて」

「じゃあ、朝練出なきゃいいだけじゃん」

「!？」

「ってのは冗談で……サボるのは良くねえし、一足先に学校行くよ。」

たださ、俺、お前と一緒に初日の学校行きたかっただけ。一番に制服姿のお前を見たかっただけだから」

「工藤君……」

それから工藤君は、真面目な顔つきでこう言った

「俺、灰原のこと好きだよ。だから一緒に学校行きたいし、手繋ぎたいし、それに……だきしめたりしたいよ。でも、俺が急に変わったら、お前が離れて行っちゃうかもって怖かったから、夏休みの間我慢してたんだ。でも気付いた、我慢してる俺って本当の俺じゃないってさ」

自分が変わったら、離れていってしまうかもしれない

工藤君も同じことを考えていたんだ

悩んでいるのは私だけじゃなかったんだ

「ってことで灰原、今日から今まで通りに接するのは無理だ。お前は……俺の彼女で、俺はお前の彼氏なわけで、だから……そうい

う雰囲気になっただけでも良いか？」

「……………そういう雰囲気って何かしら？」

彼の言いたかったことは全部分かったけれど、聞いてみた

顔を赤くして私に想いを伝えようとしてくれている彼が、愛しかったから

ちよつと意地悪したくなった

それから私はいつもより早く着替えて、彼と手を繋いで学校へ行った

もちろん朝練に間に合うように走って……

走るのが大嫌いだったはずなのに、今日はなんだか気持ちが良い

きつとそれは、繋いだ手から溢れているあなたの優しさのおかげね

……

毎日がこんな朝になれば良いのと思った

「 7・幸福の朝」(後書き)

自分で書いていて二人の事が羨ましくなりました(笑)

学校が始まってしまうと土日しか更新できなくなってしまうので、今日は頑張っ続けて話しも更新する予定です!!

「 8・心の中に雨」(前書き)

楽しみにしてくださっていた方、更新が遅れてすいません”

これ以上遅れさせるまいと、学校初日でへろへろでしたが、どうにか完成させる事ができました()ノ

設定はつきあいはじめて2週間後と想ってください

「 8・心の中に雨」

キンコンカーンコン

「なっ灰原、俺今日雨でサッカー部休みになったんだ。だから久しぶりに一緒に帰ろうぜ」

外はザーザー雨が降っている

昨日の夜から降っているのにまだ止まない

なんだか珍しい天気

「わかったわ。掃除当番だからちょっと待っていて。工藤君は、ちゃんと傘は持っているの？」

「おう。今回は珍しく天気予報見ていたからな！！でも俺、灰原となら相合傘でもいゝぜ」

私は彼が冗談を言ったときの笑顔が好き

そんなこと、恥ずかしいから言ったことないけれど

どこまでも照らせそうな光を放っている

「……悔しいけれど、今日は私、傘忘れちゃったのよね」

「灰原が？俺が持つてくるよりお前が忘れてくる方が珍しいな（笑）
まあいいじゃん、仲良く帰ろうぜ」

「玄関で待つていてくれないかしら？私たちの関係は、クラスの人に内緒なんだから」

「別にいいけど……わざわざ何の為に内緒にするんだよ？俺は灰原と付き合っていること知られたって良いんだぜ！！」

「私が嫌なのよ……さすが工藤君、鈍感ねえ」

「まっ、それは後で決めるとして、玄関で待つてるから」

彼はそう言うと元気に階段を駆け下りていった

工藤君はクラス的女子からモテている

クラスが違う子も、彼に好意を持っている

そんな彼と付き合いだしたら睨まれるに決まっている

私は別に吉田さんたち以外の友達が欲しいわけじゃない

けど関わりのない人から憎まれるのはさすがに……ね

だから、とりあえずまだ今は、誰にも知られたくない

（早く掃除して、彼と帰ろう）

そう思ってほうきを取って気付いた

私の他にクラスの男子『槇田洋平』しかいないのだ

槇田洋平は、いつも一人でいて誰ともつるまない一匹狼タイプの男子で、それでいて工藤君の次にモテているらしい

そんな無口の彼が、私に声をかけてきた

「灰原、今日他の掃除のメンバー遠征とサボりでいないから、掃除無しにしていいいか？」

そういえばそうだった

遠征2名に、サボリ常習犯2名……

どつりで私達しかないわけだ

「ええ。別にあまり汚れてないしそうしましょうか」

「……灰原ってさ、似てるよ」

「私が誰と？それより私急いでいるから」

そう言って教室を出ようとすると、榎原に腕をつかまれた

「何？放してよ」

牧原の顔は、工藤君とは違う、笑っているけど怖い、不思議な顔で私を見ていた

私と工藤君の間で、ぎこちなくも、安定を保っていた歯車が
少しずつ彼によって狂わされていく……

「 8・心の中に雨 」(後書き)

この小説の自分の中でのイメージソングは、コナンのエンディングで使われた、上原あずみさんの『無色』です

この歌を聴いていると、新一と灰原が浮かんでくるんです。

「 9・光と影 」

「何？離してくれない？」

そういつても槇原は私の腕を離さない

「俺と似てるんだよ。お前」

「私があなたと似てる？」

それから槇原は私の腕を離し、ゆっくりと確かめるように言った

「俺とお前はさ、影なんだよ。暗くて底なしの海底みたいなさ」

「才覚が暗くて、いつもふてくされた顔をしているところがかしら

「？」

さっきまでつかまれてた腕がまだ痛くて、思わず嫌味が入ってしまった

「俺のこと、良く分かってるみたいだね。でもそっいうんじゃない。てさ、表に出ないところがそっくりなんだ」

「……………」

私は言っていることが理解できなくて、なんて言葉を返したら良いか分からなかった

それを察したのか、榎原から話し始めた

「初めて灰原見たとき思ったんだ、同じだな…って。俺達ってさ、持っている心の影の色が近いんだ」

「そんなの一目で分かるものかしら？」

「わかるよ。灰原だって俺を見て同類だって感じなかった？」

そう聞かれて考えてみる

確かに私達はどこか似通っている

でもそれを認めたくない

私の心が、彼を怖がっている

「今さ、心の中で思っているでしょ？こいつ、毎日クラスの誰とも話さないくせに、なんで急にお喋りになっているんだってさ」

「そんなこと……」

思っていないと言ったら、嘘だ

「言い訳すんなよ。分かるんだよ、影は影のことよく知ってる」

「私のこと、簡単に分かった口利かないでくれる？」

（私のことを一番よく知っているのは、あなたじゃない）

「そんな怖い顔すんなよ。せっかく美人なのにさ。そういえば……江戸川は灰原のどこら辺が好きなんだろうな？なあとっちだと思っ？」

榎原はいたずらをしている少年のような顔で私に問いかけてきた

この言い方だと、榎原は私と工藤君の關係に気付いてる感じだ

「そう。私のことなら何でも知っているのね」

「学校つてさ、すっごいヒマだろ？だから暇つぶしに人間觀察するんだ。休み時間に耳を澄ましているだけで、クラスに馴染んでいなくても“情報収集”出来るんだ」

「あら、ただ単に休み時間を過ごしていた訳じゃないのね」

「まあな。そして俺はすぐにピンときた、こいつら両想いになったに違いないって。もちろん俺はそうなる前からお互いの気持ちには気付いていたけどな」

「えっ!？」

「江戸川つてさ、灰原を見てるときの眼がさ、すごく優しいんだ。それが最近一段と増してきたから、もしかしたらそうかになって」

工藤君が私をどんな感じで見ているかなんて知りもしなかった

私は自分の気持ちを知られるのが怖くて、なるべく工藤君の顔を見ないようにしていたから

「灰原、影は光に憧れてしまう。それはごく自然なことなんだ。まだ話したことないけれど、江戸川は光の方だよ。それも普通よりすごいやつ」

「影は光に憧れるか……そうね、確かに一理あるわね。じゃあ、同

じく影のあなたも憧れの光が存在するのかしら？」

「まあな。出席番号6番真田麻紀。アイツが俺の光」

「真田さん？以外ね」

真田さんはクラスで一番人気のある、明るくて性格も良さそうなタイプの子だ

どこか彼女を……毛利さんを感じさせる雰囲気を持っている

きつと工藤君の理想だったタイプに近い女の子

「なぜ真田か不思議か？まっ、それはまた次話すよ。どう？俺に興味が湧いてきた？」

「別に、とんだロスタイムだったわ」

「そうだよな、玄関に江戸川待たせてるんだもんな。それ、知ってたけど、今灰原と話さないと後悔するって気がしたから引き止めちゃったんだ」

「後悔?？」

「俺、強がっているだけで本当は弱いんだ。どこかで自分と同じような傷を持った仲間を求めている。江戸川の力で、灰原の心の影がどんどん晴れていくと、俺ひとりぼっちになってしまう。そうならきつと耐えられないだろうから」

「どうして私なの? せっかつく……彼の前で素直になれて、幸せを感じ始めたばかりなのに。言っておくけど、私はあなたの想像上の世界に関わっているつもりないから」

「もう遅いよ。お前は俺の物語にピッタリな存在なんだ。名前が愛するあいじゃなくて哀しいほづのあい……そこも気に入った。」

(こいつ、イカれてる)

「どつでもいいわ。じゃ、私急いでいるから」

急いでカバンをとって教室を出て、階段を駆け下りる

『影は光に憧れる』

このフレーズが頭から離れない

上がる息と同じペースで、心の空洞がどんどん広がっていく

ふさがりかけていた心の傷が、また戻ってしまった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7429b/>

I change little by little

2010年12月3日05時55分発行